

『エッセー』を読み始めるために

山本佳生

Nihil sub sole novum...

Ecclesiastes, I-10

はじめに

私たちは本当にモンテーニュのことを知っているのだろうか。また、『エッセー』を十分に読むことができているだろうか。長いこと私たちの前には「ヴィレー＝ソーニエ版」と呼ばれるエディションが置かれてきたが⁽¹⁾、近年、それとは異なる底本に基づくエディション、すなわち「1595年版」と呼ばれるものが相次いで出版されている⁽²⁾。十年ほど前には、バルサモ、マニャンらによる新しいプレイアード版が出版された⁽³⁾。これは徐々に浸透してきており、論文などでも使われる機会が増えている。日本での状況についていえば、1595年版のテキストの翻訳が完成し⁽⁴⁾、それ以前のヴィレー＝ソーニエ版に基づくテキストの翻訳⁽⁵⁾と両立する形でモンテーニュの『エッセー』を楽しめるようになったといえる。他方では、エディションについての詳細な説明、それぞれの底本についての歴史的経緯、モンテーニュ自身がおこなった加筆や修正にもなって生じるヴァリエーション（異文）の検討などがなされてきている⁽⁶⁾。また新しいプレイアード版でも、こうした問題について触れられている⁽⁷⁾。モンテーニュ研究者たちは当然のことながらそれらについて知悉したうえで、みずからの研究を進めているはずである。だが、それらの——ときには錯綜し、混乱を引き起こしかねないほど豊富な——情報を整理し、一般的かつ一貫したものとして共有しておくことが、いまここで必要なのではないだろうか。そして『エッセー』とモンテーニュの実人生の関係について、もう一度ここで振り返っておくことも有益なのではないだろうか。すでにいくつかが優れた研究があるとはいえ、新たな事実や情報も明らかになっているので、アップデートが必要であるように思われるからだ⁽⁸⁾。したがって本稿では、モンテーニュ研究者にとっては既知の事実であり、蛇足であることを承知したうえで、上で述べた問題について少し論じてみたいと思う。毎年、モンテーニュや『エッセー』についての研究が数多くなされているが、ここでは『エッセー』について論じる以前の段階、つまりモンテーニュの人生において『エッセー』はどのような意味を持っ

ていたか、年代別に出版された『エッセー』はどのような意義を持っているのかについて見ていきたい。これらは教科書的で些末なものとなるかもしれないが、多少なりともモンテーニュないし『エッセー』の魅力を感じることに繋がればよいと思う。

1. エディションの成立過程と底本にかんする問題

ここからは時系列に沿って、モンテーニュの『エッセー』の出版と、それを巡るモンテーニュ自身の意図、さらには当時の政治的状況も含めて見ていきたい。主に出版年度、出版社、どういった特徴があるかについて整理していくが、その際、それぞれのエディションの略号を最初に示す。それらは新版プレイアードに用いられているものである⁽⁹⁾。

*

80：1580年ボルドーのシモン・ミランジュ書店 Simon Millange、八折判、二巻本⁽¹⁰⁾。この版の成立過程について語るには、モンテーニュの判事時代から思い起こさねばならない。1556年モンテーニュ二十三歳の時、叔父のゴージャック領主ピエールからペリグー租税法院のポストを譲ってもらった。翌年にはこの租税法院がボルドー高等法院に吸収され、それに伴って異動。法学士の資格も持っていないうえに、父親がボルドー市長ということもあり、当初は法院内で疎外されたようだが、ラテン語の確かな実力や論述を上手く要約する能力を示し、次第に頭角を現す。他の同僚たち同様に、ゆくゆくは決審部の一員となることを目指す⁽¹¹⁾。モンテーニュは高等法院予審部に所属していたが、ここでの業務の一つに王宮へ裁判記録を届けるものがあり、同僚たちよりも年少で馬も巧みに乗りこなすモンテーニュは頻繁にこの任務をこなした。この際に王の側近たちと近づきになる。とりわけ地元の大貴族トランス侯爵ガストン・ド・フォア Germain-Gaston de Foix, marquis de Trans をはじめとしたフォア一族（フォア・カンダル、フォア・ギュルソンなど）と親密な関係を築く⁽¹²⁾。他方で1563年には畏友ラ・ボエシを喪い、68年には父ピエールを亡くす。65年には、かつての高等法院院長ジョフロワ・ド・ラ・シャッセヌ Geoffroy de La Chassigne の孫娘フランソワーズと結婚し、ラ・シャッセヌ家とのつながりによって法院内での立場は向上する。ところが、同僚たちからのやっかみや反感も増大し、法院内での派閥争いではこの血縁がかえって不利に働き、結局、予審判事から決審部への昇進は叶わないまま、70年にフロリモン・ド・レイモン Florimond de Raemond に職を譲り引退。法服貴族としてのキャリア形成に挫折する。

ちょうどその頃、カトリック極右から穏健派へと態度を変えたトランス侯は地域と国家の問題に対処できる人材を探していた。近隣に住み、カトリックとプロテスタント両派の融和に活躍できそうだと見込まれたことで、モンテーニュはガストン・ド・フォアという政治的パトロンを得る。

そのおかげで、退職して一年足らずのうちに聖ミシェル騎士団に叙せられ、王室侍従武官に任命される。また同様にプロテスタント側にも重用され、77年にはナヴァール宮廷の侍従武官となる⁽¹³⁾。ところが、79年にはコンデ公がラ・フェールを急襲。第七次宗教戦争が勃発。王国の南西部の情勢はにわかに怪しくなる。この状況下で、モンテーニュは書き溜めていた『エッセー』を印刷、出版。地元のミランジュ書店 Simon Millange はこの差し迫った状況下で可能な限り早く印刷するために選ばれたのだった。この『エッセー』は政治、外交、軍事が主な主題であり、これはアンリ三世の関心を引くために選択されたものかといえよう。事実、80年7月には、疫病を避けてサン・モール・デ・フォッセの大修道院にいた国王に拝謁し、自著について高評価を得ている⁽¹⁴⁾。この『エッセー』の目的はまさしく、国王に自分を知ってもらうためであり、判事時代に養った判断力や簡潔に要約する能力、さらには誠実さをアピールすることであった。さらに国王の関心を引く外交や軍事について見識を示すことで、より重要な外交のポスト、すなわち大使職を得られやすくしている。モンテーニュはちょうどその頃にローマ大使が交代することを知っていたようだ。そのため、この80年版『エッセー』は国王に対し自分の誠実さと能力を示す「履歴書 *curriculum vitae*」⁽¹⁵⁾であると同時に、ローマ大使職に選んでもらうための自己推薦書でもあったのだ⁽¹⁶⁾。

82：1582年同じくシモン・ミランジュ書店、八折判、二巻本⁽¹⁷⁾。おそらく旅先で何らかのポストを得たら必要となるであろう秘書をモンテーニュは連れている。さらに同行のシャルル・デスティサック Charles d'Estissac⁽¹⁸⁾は十七歳前後であるが、国王と王母からアルフォンソ・デステ Alfonso d'Este 宛の推薦状を託されている時点で、このイタリア旅行は普通のものではない。多かれ少なかれこの旅行は政治的な意味があるだろう。カトリーヌ・ド・メディシスは次のローマ大使にポール・ド・フォア Paul de Foix（前ヴェネツィア大使。任期1567-70年）を据えたがっていた。しかし教皇グレゴリウス十三世はなかなか首を縦に振らない。教皇がこのフォアを大使として承認するまでの暫定的な大使としてモンテーニュはローマに赴いたのではないとも考えられる。あるいはまた、ポール・ド・フォアはモンテーニュがラ・ボエシの詩集を出版した際に献呈した相手であり、旧知の仲であるから、ローマ大使ではなくほかの大使職に就くために、わざわざドイツ、スイスを通る遠回りをして見聞を広めたのではないとも考えられる。いずれにせよモンテーニュはパリの国王とローマの教皇とのあいだで政治的役割を演じていたのは確かである。

やはり3月15日は宿命的な日なのだろうか。かつてカエサルにとってそうであったように、この日にモンテーニュの運命も決まる。王太后カトリーヌ・ド・メディシスはポール・ド・フォアを再びトゥールーズ司教に任命するか（77年に一度任命されている）、ローマ大使として認めるかの二者択一を教皇に迫り、この日にフォアをローマ大使にすることが決まった。また、アンリ三世は王国の南西部を安定させたがっており、このときギユイエンヌ地域の国王代理を務めていた武闘派のピロン元帥 *Maréchal Biron* は、ナヴァール王からかなり嫌われていたので、マティニョン元帥 *Maréchal Matignon* と代えるように、王太后はこの日に国王に提案したようだ。そうすると

マティニオン元帥とともに働ける人物が必要になる。父ピエールはボルドー市長を務め、モンテーニュ家も妻の家系もボルドーでは大きな影響力を持ち、さらに地元のフォア一族からの信頼も厚く、ナヴァール王にも信用があるモンテーニュは、まさにうってつけの人物だった。1581年9月7日モンテーニュのもとに市長選出の知らせが届く。結局、望んでいた大使職には就けず、外交分野でのキャリアもここで一旦挫折する。代わりに得たものといえば、ローマ市民権とボルドー市長職であり、これはいわばローマとパリからの政治的報償であった⁽¹⁹⁾。

印刷を急がしたせいか、誤字脱字、ページずれが数多くある杜撰な80年版『エセー』をモンテーニュは修正したいと考えていた。他方、ミランジュ書店もモンテーニュが地元ボルドーの市長になったことで、この作品がさらに売れると見込んだ。イタリア語の引用が八つ、ラテン語の引用が八つ、ラテン語をイタリア語に翻訳した引用が一つに加え、少なくとも二行にわたる文が新たに三十四加筆されたこの1582年版の「刊行 la publication」は、著者の肩書に「ボルドーの市長にして提督」が付加されたことが示すように、新たに就任した市長の人柄や特質についての「広告 la publicité」でもあったのだ。これによりモンテーニュは、地元ボルドーでの地位を固め、王国南西部における存在感を示すことができた。

88:1588年パリのアベル・ランジュリエ書店 Abel L'Angelier、四折判、三巻本⁽²⁰⁾。二期四年のボルドー市長職を終えたモンテーニュは『エセー』の執筆に専念できたかといえば、現実はそのではない。85年のヌムール協定 *Traité de Nemours* によってカトリックを唯一の正教としたことで、王国内にはわかに荒れはじめ、国王と王太后もギーズ公 Henri de Guise を中心とした旧教同盟 *La Ligue* の勢いをなんとか抑えたいと考えていた。アランソン公の死(84年)以来、王位継承者第一位のナヴァール王がカトリックに改宗してくれさえすれば、事態は上手く収まるのではないかというのが彼らの見立てである。その頃、ボルドー市をはじめギユイエンヌ一帯で発生したペストを避け、さながらキャラバンのように放浪していたモンテーニュ一家を王太后は見つけ出し、馬や服からすべて整えてやり、モンテーニュを再び政治的交渉の場につかせる。アンリ三世とナヴァール王は86年のサン・ブリス会談 *Saint-Brice* で話し合ったが、結局ナヴァール王のふんざりがつかずに終わる。翌年10月のクートラ *Coutras* の戦いでジョワイユーズ公 *le duc de Joyeuse* を破って大勝したナヴァール王は、23日にモンテーニュの城館に泊まりに来た。どうやらこのときモンテーニュはナヴァール王にアンリ三世との交渉を頼まれたようだ。88年のはじめから情報筋では盛んにモンテーニュの秘密の任務について噂されていた。ナヴァール王の重臣デュプレッシ・モルネ *Duplessis-Mornay* は妻に、モンテーニュがパリに出發したのもうすぐ和平がなされるだろう、と書き送り、イギリス大使スタッフォード卿 *Sir Edward Stafford* は、マティニオン元帥の息子とともに、非常に賢明なモンティニー某(原文ママ)というナヴァール王の侍従武官がパリへやってきて国王にナヴァール王の言葉を伝えるらしい、と報告書に書き、スペイン大使メンドーザ *Bernardino de Mendoza* もまた、フェリペ二世に宛てて、ナヴァール王の愛人である「麗しのコリザンド *La Belle*

Corisande」ことギッシュ伯夫人⁽²¹⁾を思うように動かし、ナヴァール王とも親しいモンテーニュがパリへやってくる。これは何かの密命を帯びているのではないか、と報告している⁽²²⁾。けれどもパリはまだミサに値しないのだろうか。このときもまた、ナヴァール王は旧教同盟に共に立ち向かうとは提案したが、宗教にかんしては曖昧な態度を崩さず国内の緊張状態は継続した。モンテーニュはいまや、かつて望んだ大使職よりもはるかに高度で重要なポストに就いたといえるが、良い結果が残せたかといえば、その点については否定せざるをえない。

1587年にパリのジャン・リシェ書店 Jean Richer から出版された『エセー』は82年版のテキストであるが、実際は83年頃にルーアンで出版された海賊版に基づいている。海賊版が意味するのは、『エセー』がよく読まれた、さらに言えば「売れる」本であったということだ。リシェ書店はおそらくミランジュ書店から出版の許可を得ていたようだ。また、88年版を出版するランジュリエ書店もミランジュ書店とは提携関係にあった。ランジュリエ書店は83年頃からモンテーニュと接触をはじめていたようだ。またモンテーニュの側でも、友人ブラック Pierre de Brach の勧めもあってか、新しい出版元を探していた。ここで双方の利益が一致する。より広範な読者層に対し、今度は自分自身とその経験、判断について語ることを目的とした『エセー』は、ランジュリエ書店が取った新たな特認（1588年6月4日から九年間）のもと出版される。それまでの第一、二巻に対し、543の新たな引用と641の加筆、さらに第三巻を構成する13章が加わった。注目すべきは著者の肩書である。「王室侍従武官」や「ボルドー市長」といったものは取り払われ、単なる« Michel, Seigneur de Montaigne »となっている。ここからモンテーニュが政治的なものと距離を置こうとしているのがわかるだろう。事実、テーマ群も軍事や外交から離れ、自分の病気、老年、死といった個人的なものが多くなる。この88年版『エセー』は「読者に *Au lecteur*」において彼自身が述べた、誠実でありのままの姿を見せるという言葉がまさしく実現されているものなのだ。

EB：88年版のモンテーニュ手沢本⁽²³⁾。ひとがしばしば口にする人生のターニングポイントがモンテーニュにあったとしたら、1588年7月10日はその一つだったのかもしれない。6月にランジュリエ書店の印刷機が『エセー』を生み出しているあいだ、モンテーニュは旧教同盟によってほぼ占拠状態のパリを離れたアンリ三世に随行していた。7月はじめにパリに戻ってきたようだが、このとき彼はすでに病体であった。そんななかで10日にバステューユ牢獄へ投獄されたのだ。これにはカトリーヌ・ド・メディシスがギーズ公に働きかけ即日釈放となった。これを機にモンテーニュは政治的事柄からは離れる。かつては判事であり、大使職の代わりに得た市長職を十分に果たし、ついには三人のアンリのあいだで重要な政治的役割を果たしたモンテーニュにとって、この事件は『エセー』の「著者」となる転換点となったといえよう。事実、この年の夏はパリを離れ、すでに知り合っていたグルネー嬢のもとに滞在し、出版したばかりの88年版に書き込みをはじめている。その後、領地に帰ってからも手を休めることなくモンテーニュはこの88年版（以後これを EB：Exemplaire de Bordeaux と呼ぶ）に書き込みをおこなっている。だが、その書き込みの量があ

まりに多くなり、別の紙を貼って対応するにも限界があったので、もう一つの 1588 年版にも書き込みをはじめたことがわかっている(以後これを「底本 X」と呼ぶ。1595 年版の底本となったもの)。けれども彼はずっと『エセー』と向き合っていたわけでもない。1588 年のプロワの三部会に出席後、ギーズ公アンリの暗殺、カトリーヌ・ド・メディシスの死去、アンリ三世の暗殺などが続くなか、モンテーニュは、後任のボルドー市長であるマティニオン元帥の補佐としてボルドーにおり、アンリ四世を国王として承認させるための働きかけをおこなっていた。1590 年には娘のレオノールの結婚もあり、翌年には懇意にしていたトランス侯ガストン・ド・フォアの遺言作成にかかわっている。

1592 年 9 月 13 日モンテーニュ死去。モンテーニュ夫人はピエール・ド・ブラックと相談し、遺稿の整理をする。EB は城館に置かれたままであり、1596 年にはすでに 1595 年版を上梓したグルネー嬢が本文照合のために城館を訪れている。1593 年 5 月 1 日モンテーニュの遺体がファイヤン派修道院に移送されたときに EB も一緒に移されたと考えられていたが、実際は 1614 年にモンテーニュ夫人が、当時の修道院長への親密さの証として遺贈したのだった。この際に EB は端を裁断され、金箔で装丁されたようだ。1772 年に城館で『旅日記 *Journal de Voyage*』の原稿が見つかり、パリで出版準備のすすむなか、モンテーニュの筆跡と照合するために EB はパリに移される。その後 1802 年に EB を底本としたエディションが出されるが、実質的には 1906 年まで EB は無視されてきたといえる。そしてついに、1906 年から 1933 年にかけて EB を底本とし、1595 年版などの異文も取り込んだ「ボルドー市版 *Edition Municipale*」が出版される(全五巻)。このストロウスキ、ヴィレー、ジェブランによるエディションが決定版としてこの一世紀の間受け入れられてきた⁽²⁴⁾。

95 : 1595 年同じくアベル・ランジュリエ書店、フォリオ判、三巻本⁽²⁵⁾。88 年版が出版されてから、モンテーニュは EB と呼ばれるものに一番はじめに書き込みをしているのは間違いがない。また、印刷業者への指示も書き込まれていることからそれを底本にしようと思っていたのは確かである。しかし、その書き込みが増えてきたので、新しいものに書き込みを始める。またそれ以外にも三つ、モンテーニュが書き込みをした 1588 年版が見つまっていることから、合計で少なくとも五つにモンテーニュは書き込みをおこなっていることが確認されている。新しく底本 X に書き込みをはじめたことで EB はそれまでの書き込みを保存しておく、いわば「バックアップ *une copie de sauvegarde*」⁽²⁶⁾として機能していたようだ。おそらく EB は城館に置いたままにしておかれたのではないだろうか。1592 年モンテーニュの死後、ピエール・ド・ブラック(とモンテーニュ夫人)は状態もよく、まだ十分に余白も残っていた底本 X を次なるエディションの底本とすることに決め、城館に残っていた EB と本文を照合し、添付してあった追加の紙片を貼り替えたのだろう(EB に紙片をはがした形跡があるのはこのため)。したがって現在の 1595 年版が EB とほとんど同じ加筆を含んでいるのは、ブラックの献身的な転写のおかげである。この作業はおよそ一年半かかっている。1594 年にブラックはパリのグルネー嬢のもとに底本 X を送付。このときの底本 X は①

EBの書き込みを転写したもの、②EBに張り付けた別紙を反映したもの、そして③EBにはない底本X独自の書き込み、の三つが合わさった状態である。また、95年版のテキストがEBの修正を反映していることから、底本Xは時系列的に見て、EBよりも後のものであることがわかっている。

Anvers: 95年版にグルネー嬢が修正を施したもの⁽²⁷⁾。95年版を出版後、グルネー嬢はモンテーニュの城館に十五か月にわたって滞在する(95年終わりから97年はじめにかけて)。この際城館に残されていたEBと自分が出版したばかりの95年版のテキストを照合する。1596年5月2日、当代最高の学者であるリプシウス Justus Lipsius に宛てて、EBを95年版出版の前に参照できなかったことを嘆き、自分がつけた長大な序文を後悔している旨の手紙を送っている。それからおよそ半年後の11月15日には、95年版をリプシウスに三部送付している。一つはリプシウス個人に宛てて、そしてあとの二つは、バーゼルやストラスブールの有名な書店にリプシウスの手で送ってほしいかと頼んでいる。これは彼の名声や権威を外国で出版される『エッセー』にもたらしたいというグルネー嬢の願いでもある。この三部にはグルネー嬢による修正がなされており、短い序文が添えられ、正誤表もつけられている。これら以外にも、グルネー嬢はアントウェルペンの有力書籍商プランタンにも同様のものを送っており、現在プランタン＝モレトゥス博物館に収められている(R40.5)。これが*Anvers*と呼ばれるエディションであり、ここに含まれている修正は次の1598年版に反映されている。

98: 1598年同じくアベル・ランジェリエ書店、フォリオ判、三巻本⁽²⁸⁾。95年版テキストに基づく新版。グルネー嬢がEBと照合して修正したものが反映され、句読点や綴り字の修正が行われている。グルネー嬢はこれ以後も出版の特認を更新しながら、1635年版まで『エッセー』の管理人として力を尽くす。1635年版はリシュリユー枢機卿宛てに献呈されており、これ以後、著作権はパリのジャン・カミュザ Jean Camusat 書店に移る。95年版の出版以降、およそ二世紀にわたって、ブラックとグルネー嬢の献身的な努力によるテキストが受け入れられたことになる⁽²⁹⁾。

2. 加筆、修正、「永遠の葬送」

1580年に出版された『エッセー』がいわば国王への「履歴書」だったとしても、それらを書き始めた動機は一体どこにあるのだろうか。『エッセー』の誕生の契機となった出来事としてはまず第一に、公職からの引退が挙げられるだろう。1571年2月28日モンテーニュ38歳の誕生日に、塔の三階にある書斎の隣の小部屋の壁に引退の辞を彫らせているのは有名である⁽³⁰⁾。そして『エッセー』第一巻8章「無為について」でも詳しく述べられているように、自分の精神を無為のうちに放置

しておいたら、妄想や空想の怪物が次々に生まれてきたので、これらをあとで眺めようと思って「記録する *mettre en role*」ことにしたのである。これが一般的に『エッセー』の誕生を知らせるものだと思われてきた。だが壁の銘文はもう一つあったのだ。それは書斎の仕切りの壁に彫られており、現在は見えなくなっているが、十八世紀にこの書斎を訪れた人々の証言によって明らかになったものである。1563年8月18日に畏友ラ・ボエシを亡くし、彼との思い出を留めておくために、いつでも目に付く書斎の方の壁に彫らせたのだらう。そこでモンテーニュは、彼を失って打ちのめされていたが、お互いの友情と感謝を忘れないでおくために「比類のない、記念碑のようなものを建てることを望む *SINGULARE [ALI]QUOD EXTARE CVPERET MONVMENTVM*」と記している⁽³¹⁾。そして実際、彼の死以来モンテーニュはその才能をもっと多くの人々に知ってもらおうと奔走しており、父ピエールに宛てた手紙という体裁でラ・ボエシの死の直前を詳細に報告し、1571年には彼の翻訳を含めた著作を刊行する。さらに自著のなかに彼のソネットを収める章を用意している。ところで、ラ・ボエシはモンテーニュに対して最期に「*Mon frere ! mon frere ! me refusez vous doncques une place ?*」 「友よ、それでは私のための場所を拒むといふのか」と言ったのではなかったか。書斎の壁の銘文、著作の出版、『エッセー』のなかの特権的な章、これらはすべてラ・ボエシのための「場所」であるといえるだろう。こうした事実から、この友の死が『エッセー』の誕生につながったといっても過言ではない⁽³²⁾。

政治的動機のほかに、ラ・ボエシとの友情そして別離の悲しみがモンテーニュを知るうえで非常に重要な要素である。この哀惜の念は『エッセー』の多くの箇所であらわされているが、ここでかなり興味深い部分を取り上げてみよう。それは第二巻8章「父の子供に対する愛情について」にある。1588年版のテキストにおいて、モンテーニュは年を取ることの利点を二つ挙げる。それは色々なことに気づかずに無知でいることと、騙されやすいことである。ここで *EB* では長い加筆がある (p° 163v° 左側。本文上から三行目の「*Feu Monsieur (...)*」の前に挿入記号がある)⁽³³⁾。最初の部分を少し引用してみよう。

Au cas que cette pippérie m'eschappe à voir, au moins ne m'eschappe-il pas, à voir que je suis très pippable. Et aura l'on jamais assez dict de quel pris est un amy, et de combien autre chose que ces liaisons civiles? L'image mesme que j'en voys aux bestes, si pure, aveq quelle religion je la respecte !

たとえこのごまかしが私の目を逃れても、少なくとも私自身が騙されやすいことは見落としてはいない。そして友人というものがどれほど尊いものか、どれだけ社会的なつながりとは異なるものか十分に言い尽くすことはできないだろう。動物たちに見るその友情でさえ非常に純粋なものなので、私はどれだけ尊敬の念をもってそれを見ることだろう。

少し唐突な印象を受けるが、モンテーニュは友情について語ろうとしている。ところが「*Et aura l'on (...)*」の前と「*(...) je la respecte !*」の後の部分に削除線が引かれているのがわかる (p° 163v° 左側加筆部分)。そこを復元してみると次のような文章が浮かび上がる。

Hureus trois et quatre fois qui peut fier en main amie sa pitoiable vieillesse. Et aura l'on (...) je la respecte ! En vaus je mieu d'en avoir le goust, ou si j'en vaus moins. J'en vaus certes bien mieu. Son regret me console et m'honore. Est-ce pas un p[後ろの「plesant」の書き損じか] pieus et plesant office de ma vie d'en faire a tout jamais les obseques. Est il jouissance qui vaille cette privation. Je me lairrois facilement endormir au sejour d'une si flateuse imagination.

哀れな老年を友人の腕の中に委ねることのできる人は、三度でも四度でも幸運なのだ。〔中略：直前で引用した部分〕私はそのような友情〔友人の尊さのこと〕を味わうに値するだろうか。それともそうではないだろうか。私は十分に値すると思う。友人への哀惜は私を慰め、誇りとなっている。永遠の葬送は私の人生の敬虔で喜ばしいつとめではないだろうか。この喪失に匹敵するような喜びがあるか。私はかくも穏やかな想像の日々のなかに簡単に入り込んでしまう。

削除線が引かれているため、EBを底本とするエディションにはこの部分は当然反映されていない。内容としては、ラ・ボエシとの友情とその後の哀惜はモンテーニュにとって誇りともなり、喜びであると述べられている。最後の文章は若干文脈との整合性が取れていないように思えるが、モンテーニュ自身の心情の吐露だろうか。そして驚くべきことに、この部分の削除線はモンテーニュによって引かれたわけではないというのが研究者たちの見解である。これについては後ほど考察する。

ところで、1595年版のテキストはどうなっているかといえば非常に興味深い事実がわかる。「(...) je la respecte !」の後には削除線を引かれた部分は本文に反映されないまま、その下にある、次の加筆部分がつながられている (EBだと f° 163v° 左側加筆部分の真ん中あたり)。しかし二十五行下の再びモンテーニュが友情について言及する箇所を上に加筆と似たものが現れるのだ。猛将で知られ、モンテーニュと同郷でもあるモンリュック元帥が息子を亡くすが、元帥は父親の威厳を保つために息子の前ではいつも威圧的な態度をしてしまい、それゆえ、息子は父の愛情を知らぬまま先立ってしまったと元帥は嘆いたという。モンテーニュはこの嘆きをもっともなことだと言い、自分は確かすぎる経験から知っているが、「友を失ったときには、我々はお互いに言い忘れたことがなく (de n'avoir rien oublié à leur dire)、完全な交際をした (d'avoir eu avec eux une parfaite et entiere communication)、という自覚を持つ以上に快い慰め (si douce consolation) はない」と断言する。この後に挿入されるのが (f° 163v° 下から六行目 « une parfaite et entiere communication »)、上で復元した加筆とほとんどよく似た文章である。

O mon amy ! En vaus je mieu d'en avoir le goust, ou si j'en vaus moins. J'en vaus certes bien mieu. Son regret me console et m'honore. Est-ce pas un pieus et plesant office de ma vie d'en faire a tout jamais les obseques. Est il jouissance qui vaille cette privation⁽³⁴⁾.

訳文は上のものとはほぼ同じであるがEBとは文脈が異なるので、「私はそれを味わうに値するだろ

うか En vas je mieux d'en avoir le goust (...)?) という内容は「友人の尊さ」ではなく、「かくも快い慰め si douce consolation」となる。この変化は重大であり、のちほど若干の考察を加えたい。また冒頭の「友よ！ O mon amy！」が加えられ、かつ「Je me lairrais (...)」は反映されていないのが見て取れる。

ここまで非常に錯綜した展開になってきたが、まとめると次の二つの謎になる。

- (i) なぜ *EB* で削除された文章が 95 年版に部分的に反映されており、かつ挿入場所が移動しているのか。
- (ii) *EB* で削除線を引いたのがモンテーニュ本人ではないとしたら、一体誰が線を引いたのか。

*

ここからの謎解きはあくまで推理であり決定的な結論ではないことに留意されたい。

まず (i) についてだが、*EB* よりも 1595 年版となる底本 X が後に書き込まれたものであるという前提のもと出発するならば、二つの可能性が考えられる。(a) モンテーニュの死後 *EB* の加筆を底本 X に転写する際、ピエール・ド・ブラックが場所を間違えて、かつ一部分だけ転写した。あるいは (b) モンテーニュ本人が、*EB* に似たような加筆を行なっているのを忘れた、あるいは意識的に、*EB* に加筆したより (f° 163v° 本文上から三行目に挿入) 二十五行下部分の底本 X に加筆していた (f° 163v° 下から六行目に挿入)。

(a) の可能性は低いだろう。というのも、間違えて転写するにしても一部だけをきっちり挿入するというのは考えにくい。だとすると (b) が妥当であろう。モンテーニュ本人が底本 X に書き込んだものなので、そのまま誰も手を加えることなく 95 年版に反映されたと考えられる。よって、*EB* で削除された文章が 95 年版では一部復元され、場所が移動しているのは、モンテーニュ本人が指示したことだから、という推論が得られる。

次いで (ii) にかんしては、アルマンゴー博士やストロウスキが他の削除と比較して、この部分の線の引き方が特異であることから、モンテーニュ本人ではないと結論づけ、最近ではシモナンがこのストロウスキの結論に異論の余地はないとして支持した⁽³⁵⁾。たしかにこの部分の削除線は同じ頁の他の線とも異なっているような印象である。では誰が引いたのか。容疑者は二人。(a) *EB* から底本 X に転写したブラック。そして (b) 95 年版を出版したのち、モンテーニュの城館に滞在して、*EB* との照合作業をおこなったグルネー嬢。

(a) 転写する際に底本 X に似た文章が一部書き込まれているのを知ったブラックは、そちらの読みを採用した。これはおそらく正しい。そして、*EB* の方の文章を紛らわしくならないように削除線を引いたのだろうか。そうだとすれば、「Hureus trois et quatre fois (...)」や「Je me lairrais (...)」にまで線を引いた理由がわからない。

次に、(b) のグルネー嬢は 95 年版で « (...) une parfaite et entiere communication » のあとに « O mon

amy ! En vas je (...) »となっているのと、EBで« (...) je la respecte ! »の後に書いてあるのを見比べて、同じ文章だからという理由で、EBに削除線を引いたのだろうか。この場合、グルネー嬢が照合する1596年まで削除線が引かれていなかったとすれば、逆にブラックはなぜ、転写の際に、この時点では線の引かれていないであろう加筆を底本Xに反映させなかったのだろうか。文が重複しているからだろうか。

線を引いたのがブラックでもグルネー嬢でも、文章が重複して、ややこしくならないようにという「配慮」が動機だろう。事実、95年版では« (...) je la respecte ! »の後に加筆部分が反映されるわけではなく、底本Xにそう書いてあったのだろうと推測される« (...) une parfaite et entiere communication »の後にきちんと反映されている。しかしながら、二人にかんしては、どちらが線を引いたかについては証拠不十分であると言わざるをえない。ところで、同じように削除線の引かれた« Hureus trois et quatre fois (...) »や« Je me lairrais (...) »が復元されないまま終わったということを考えてみると、第三の容疑者が浮かびあがる。それはまさしくモンテーニュ本人である。

ストロウスキヤシモナンの断言は考慮に値するが、モンテーニュがいつも同じ冷静さでもって削除線を引いていたという確証はなく、この部分は若干乱暴に消されているとはいえ、まったく違うインクが使われているわけでもない。モンテーニュ本人が勢いよく消した可能性も捨てきれない。したがって、(c)モンテーニュ本人が削除した、とすると次のようなシナリオが考えられる。まずEBの左側部分を加筆したのち、底本Xを読み直した際、二十五行下に部分的に同じ文章を書き入れる。そのときEBにも同じような加筆をしていたことを思い出して、重複した部分を削る。「Hureus trois et quatre fois (...)」や« Je me lairrais (...) »にかんしては、ラ・ボエシの永遠の喪に服するという「敬虔で喜ばしいつとめ un pieus et plesant office」と内容的に相容れないという理由から削ったままにしたのだろう。そしてモンテーニュの死後、ブラックはすでに削除線が引かれているのでEBから転写することなく、底本Xの読みを採用し、グルネー嬢も照合をおこなったが、その読みを尊重した。(c)のモンテーニュ本人だとすると、時系列的にも、内容的にも何一つとして矛盾することはない。もちろんこのシナリオを正当化する証拠はない。しかしこの推測を退けるのに十分な証拠もまた存在しないのだ。

最後に、モンテーニュが加筆を移動させたことで何が起きただろうか。元の文脈では、友人というものは貴重なものであり、それに自分自身は値するかと自問している。これが、友人と何一つ言い忘れることのない完全な交際をしたという自覚ほど快い慰めはない、という後ろの文脈に移されることで、この快い慰めに果たして自分は値するだろうか、という意味に変化する。この変化は、その後ろに続く文にある「永遠の葬送 a tout jamais les obseques」という、いつまでもつづくモンテーニュのラ・ボエシに対する哀惜の念を強調していると言えるだろう。「私の人生の敬虔で喜ばしいつとめ un pieus et plesant office de ma vie」とは、かけがえのない友の追憶を、『エッセー』のなかで喚起し続け、彼にふさわしい「場所 une place」に配置することにほかならないのだ。

『エッセー』はモンテーニュにとって人生のところどころで重要な役割を果たしていた。国王に自己紹介をするための「履歴書」であったり、市長としての自分を知ってもらうための「広告」であったり、そして最終的にはモンテーニュ自身の「ありのままのすがた」を見てもらう「作品」となった。さらに死後も残された書き込みや修正がモンテーニュの『エッセー』に対する情熱や愛情を物語っているといえるだろう。『エッセー』はモンテーニュ本人の意志のみならず、多くの人々の努力によって、今日の私たちのもとに届いているのだ。

しかしここで冒頭の問いに戻ろう。私たちは本当にモンテーニュのことを知っているか。答えは否である。モンテーニュは私たちの同時代人ではない。モンテーニュは私たちとは異なる社会構造、文化、慣習のなかで生活しているのだ。たしかに彼の生きた時空間を再構成しようとする研究は多く行われてきており、優れた結果を残している。それでもなお、すべてを知ったわけではないのだ。

次の問いに移ろう。『エッセー』を十分に読むことができているだろうか。これも答えは否である。現在出版されているエディションは、最終的にモンテーニュが残したと思われるテキストを採用しており、彼自身によって書き直され、消されてしまった部分は本文には反映されない。しかしそれらを『エッセー』ではないと言い切れないのではないか。テキストの何をどのように変えたのか、何を書き加えたのか、これらの思考の変遷もまた『エッセー』を読むうえで重要なのではないだろうか。たしかに新版プレイアードは豊富なヴァリエントを所収しており、*EB* に書き込まれた部分の活字複製版も存在する⁽³⁶⁾。しかし*EB* に書き込まれ、モンテーニュによって消されてしまった後、裁断された部分は、私たちからは永遠に失われたままである。

ところで、しばしばひとはモンテーニュと私たちとの接点を探り、時空を超えたメッセージが『エッセー』に書かれているのだと錯覚してしまう。繰り返しになるが、モンテーニュは私たちの同時代人ではないし、『エッセー』は私たちにむけて書かれたわけでもない。これは過去の文学作品全般に言えることだが、もし過去が私たちの現在と類縁性や継続性を持つのであれば、私たちが過去のものを研究する必要はないだろう。現在の事象をよく観察すれば済む話である。『エッセー』を含む過去の文学作品は、根源的に私たちにとっては他なるものである⁽³⁷⁾。これを認めることこそ、『エッセー』を読み始める第一歩にほかならない。ドイツの峻厳な古典文献学者も言っている。「時間と空間を通じて古代の作家に与えられていた諸前提を、近代人は忍耐強い作業によって取り戻さなければならないのだ」⁽³⁸⁾と。

注

- (1) *Les Essais*, édition conforme au texte de l'Exemplaire de Bordeaux, éd. P. Villey et V.-L. Saulnier, Paris, PUF, « Quadrige », 2004 (1^{re} éd. 1924).
- (2) Montaigne, *Les Essais*, édition réalisée par Denis Bjaï, Bénédicte Boudou, Jean Céard et Isabelle Pantin, sous la direction de Jean Céard, 1 vol., Le Livre de Poche, « La Pochothèque », 2001 ; 3 vol., « Classiques », 2002.
- (3) Montaigne, *Les Essais*, texte établi et annoté par Jean Balsamo, Michel Magnien et Catherine Magnien-Simonin, 1 vol., « Bibliothèque de la Pléiade », Paris, Gallimard, 2007.
- (4) 『エッセー』、宮下志朗訳、全七冊、2005-2016、白水社。
- (5) たとえば『エッセー』、原二郎訳、全六冊、1965-1969、岩波書店など。
- (6) たとえば *Dictionnaire de Michel de Montaigne*, sous la direction de Philippe Desan, Paris, Classiques Garnier, 2016 ではエディションや底本についてそれぞれ項目が立てられ、詳細な説明がなされているが、それらを一つ一つ読んでも、その情報量の多さにかえって混乱させられる。それゆえ本稿においては年代順にエディションを並べて、情報を取捨選択しつつ整理したいと考えている。またエディションとヴァリエーションの問題については Alain Legros が精力的に取り組んでおり、本稿において彼の研究を頻繁に参照することになるだろう。
- (7) 新版プレイアード *Les Essais*, éd. Jean Balsamo et al., *op. cit.*, « Le destin éditorial des “Essais” », pp. XXXII-LV においてバルサモによる 1595 年版の歴史的経緯の説明があり、一通りの理解を得ることはできる。
- (8) 基本的なものとしては、Donald Frame, *Montaigne : A biography*, New York, Harcourt, Brace & World, 1965. また日本では、関根秀雄『モンテーニュとその時代』、白水社、1976 年。また最近のものでは、Anne-Marie Cocula, *Montaigne, les années politiques*, édition Confluence, 2011 ; Arlette Jouanna, *Montaigne*, Paris, Gallimard, 2017. がある。
- (9) *Les Essais*, éd. Jean Balsamo et al., *op. cit.*, « Note sur la présente édition », p. XCVII.
- (10) R. A. Sayce and David Maskell, *A Descriptive Bibliography of Montaigne's Essais 1580-1700*, London, The Bibliographical Society, 1983, pp. 1-6 ; Philippe Desan, « Édition de 1580 », in *Dictionnaire de Michel de Montaigne*, *op. cit.*, pp. 343-346. また George Hoffmann, *Montaigne's Career*, Oxford, Clarendon Press, 1988 ; P. Desan, « Les politiques éditoriales de Montaigne », in *Montaigne Politique, Actes du colloque international tenu à University of Chicago (Paris) les 29 et 30 avril 2005*, réunis par Philippe Desan, Paris, Honoré Champion, 2006, pp. 263-286. さらに本稿全体にかかわるものとして P. Desan, *Montaigne : A Life*, translated by Steven Rendall and Lisa Neal, Princeton Univ. Press, 2017 (First Paperback edition 2018) がある。これは同著者の *Montaigne : Une biographie politique*, Paris, Odile Jacob, 2014 の英訳であるが、注や書誌が非常に見やすくなり、訳注も充実している。したがって本稿では英訳版を参照する。以下、モンテーニュの政治的動向にかんしてはこの大著に大いに負っている。有益な情報があまりに多いので、細かいページ数を示すことはせず、大きくまとまった章ごとに記すことにする。
- (11) 高等法院 Parlement はいくつもの部局からなり、十六世紀ボルドーでは四つに分かれていた。一番上が決審部 Grand Chambre であり、その下にはほかの三つの部局がある。まず予審部 Chambres des Enquêtes があり、モンテーニュはこの第十席に位置していた。次に交替審理部 Chambre de la Tournelle であり、これは刑事裁判を扱う。ここには専任の職員がいないので、他の部局の者が交替で

- 任務に就いた。最後に上訴請願特審部 *Chambre des Requêtes* があり、これは一般人ではなく、高官たちの民事裁判を担当した。Cf. 関根秀雄、前掲書、pp. 229-230.
- (12) フォア一族をはじめとして、カトリック、プロテスタント両陣営からのモンテーニュの後援者については次を見よ。J. Balsamo, « Un gentilhomme et ses patrons : Remarques sur la biographie politique de Montaigne », in *Montaigne Politique, op. cit.*, pp. 223-242. またモンテーニュは『エッセー』第一巻 26 章「子供たちの教育について」をギュルソン伯夫人ディアースに捧げている。この人はフレデリック・フォアの娘であり、トランス侯の息子ルイと結婚する。このルイとモンテーニュはギュイエンヌ学院で同窓生である。
- (13) 1572-76 年にかけてモンテーニュはギーズ公とアンリ・ド・ナヴァール（聖バルテルミの虐殺以降カトリックに改宗させられ、王宮で軟禁状態だった）の仲介役を果たしていたのではないかと考えられているが、積極的かつ重要性をもって両者の折衝をはかったのは、ナヴァール王が王宮を脱出して以降（特に 78 年と 86 年）ではないかと Maskell は指摘している。Cf. D. Maskell, « Montaigne médiateur entre Navarre et Guise », in *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance (désormais BHR)*, vol. 41, 1979, pp. 541-553.
- (14) *Les Essais*, éd. P. Villey et V.-L. Saulnier, *op. cit.*, « APPENDICE III », p. 1315. 書誌学者ラ・クロワ・デュ・メヌによれば、国王に『エッセー』が気に入ったと言われたモンテーニュは次のように答えたという。「陛下、私の本が陛下を喜ばせたのなら、それは私が陛下の気に入ったのも同然のことでございます。というも、私の本には、私の生活全般と行動の数々についての記述があるだけでございますゆえ」。この著者と作品の一致は文学的に解釈されがちであるが、『エッセー』出版の意図が政治的なものであるならば、それが「履歴書」であるという見方は十分に裏付けられるだろう。
- (15) P. Desan による表現。「Les politiques éditoriales de Montaigne », *art. cit.*, p. 218 を見よ。
- (16) ここまで、より詳しくは Desan (2017), *op. cit.*, ch. 6, pp. 254-316 を参照のこと。
- (17) R. A. Sayce and D. Maskell, *op. cit.*, pp. 7-9 ; Alain Legros, « Édition de 1582 », in *Dictionnaire de Michel de Montaigne, op. cit.*, pp. 346-348 ; « Introduction », in *Essais (1582)*, texte présenté par Philippe Desan, Paris, Société des Textes Français Modernes, 2005, pp. VII-XLVIII ; Claude Blum, « Dans l'atelier de Millanges. Les conditions de fabrication des éditions bordelaises des *Essais (1580, 1582)* », in *Editer les Essais de Montaigne*, sous la direction de Cl. Blum et André Tourmon, Paris, H. Champion, 1997, pp. 79-97 ; A. Legros, « Petit 'eB' deviendra grand... : Montaigne correcteur de l'exemplaire 'Lalanne' (Bordeaux, S. Millanges, 1580, premier état) », in *Montaigne Studies*, vol. XIV, 2002, pp. 179-210. また教皇庁の検閲官から『エッセー』の内容について受けた指摘については A. Legros, « Montaigne, face à ses censeurs romains de 1581 (Mise à jour) », in *BHR*, vol. 71, 2009, pp. 7-33.
- (18) シャルルの母 Louise にモンテーニュは『エッセー』第二巻 8 章「父親の子供に対する愛情について」を献呈している。ローマ滞在中モンテーニュはバチカンの書庫に入らせてもらい、貴重書の数々を閲覧しているが、当時ローマで哲学や法学を教えていたユマニストのミュレですら閲覧させてもらったことがないという点を考慮すると、破格の特別待遇であると言えるだろう。また、当地ではロシアやポルトガルなどの大使にも会っており、一介の地方貴族の物見遊山と考えるのは難しい。Cf. Montaigne, *Œuvres complètes*, éd. A. Thibaudet et M. Rat, Paris, Gallimard, 1962, « Journal de Voyage en Italie », pp. 1219-1237.
- (19) イタリア旅行と大使職との関係について詳細な事情は Desan (2017), *op. cit.*, ch. 7, pp. 319-407 を参

- 照のこと。また、Daniel Ménager, « La diplomatie de Montaigne », in *Montaigne Politique*, *op. cit.*, pp. 139-153 ; Timothy Hampton, « ‘Tendre negociateur’ : La rhétorique diplomatique dans les Essais », in *Montaigne et la rhétorique*, éd., J. O’Brien *et al.*, Paris, H. Champion, 1995, pp. 189-200 はルネサンス期の外交や交渉について示唆に富んでいる。
- (20) R. A. Sayce and D. Maskell, *op. cit.*, pp. 12-15 ; J. Balsamo, « Édition de 1588 », in *Dictionnaire de Michel de Montaigne*, *op. cit.*, pp. 350-352 ; J. Balsamo et Michel Simonin, *Abel L’Angelier et Françoise de Louvain (1574-1610), suivi du catalogue des ouvrages publiés par Abel L’Angelier (1574-1610) et la veuve L’Angelier (1610-1620)*, Genève, Droz, 2002, n° 203-204. また政治的動向については Desan (2017), *op. cit.*, ch. 9, pp. 482-548.
- (21) ギッセン伯 (ギッシュ伯) 夫人ディアース・ダンドワン Diane d’Andoines はモンテーニュがその死を看取ったフィリベール・ド・グラモン (ラ・フェール攻囲戦での傷がもとで死ぬ) の妻。モンテーニュは彼女に『エッセー』第一巻 29 章「エティエンヌ・ド・ラ・ボエシの 29 のソネット」を献呈した。このあだ名は十六世紀スペインで流行した小説『アマデイス』の主人公から取られている。1582 年頃からナヴァール王の寵愛を受け、二人の関係は単なる愛人ではなく、ときには政治的な助言を夫人が行なうなど、尊敬と信頼で結ばれていたようだ。
- (22) Cf. D. Frame, *op. cit.*, pp. 272-273 ; 関根、前掲書、pp. 551-558 ; P. Desan (2017), *op. cit.*, pp. 501-508, « Secret Mission ». 1585 年の時点でモンテーニュはナヴァール王とマティニヨン元帥を上述のギッセン伯夫人を介して近づけようとしていることが手紙から伺える (1 月 18 日付)。Cf. *Œuvres complètes*, éd. A. Thibaudet et M. Rat, *op. cit.*, « Lettre XVIII. Au Mareschal de Matignon », p. 1383, « (...) j’avois escrit à madame de Guissen de se servir du tamps pour la commodite de son navire [=Navarre] a quoi je m’emploierois envers vous & que je lui avois done conseil de n’engager a ses passions l’interest & la fortune de ce prince (...) ». 「私はギッセン伯夫人に宛てて、私がナヴァール王に貴殿 [マティニヨン元帥] を近づけるのに便宜を図ってほしいと書き送りました。また、ナヴァール王の利益と運命を彼女の愛情に巻き込まないように忠告いたしました」。
- (23) R. A. Sayce and D. Maskell, *op. cit.*, pp. 16-17 ; P. Desan, « Exemplaire de Bordeaux », in *Dictionnaire de Michel de Montaigne*, *op. cit.*, pp. 421-426 ; M. Simonin, « Le Périgourdin au Palais : Sur le voyage des Essais, de Bordeaux à Paris », dans *L’Encre et la Lumière*, Genève, Droz, 2004, pp. 509-522. EB と底本 X について詳細に考察したのが P. Desan, *Montaigne dans tous ses états*, Fasano, Schena, 2001, ch. IV, « L’Exemplar et l’Exemplaire de Bordeaux », pp. 69-120. ところでここでは EB と 1595 年版のどちらが良いかといった決定不可能な議論には立ち入らないが、EB 支持論者 André Tournon の叱咤は耳を傾ける価値がある。Tournon によれば、EB には文章の加筆や修正以外にも句読点の位置や大文字への変換の指示があるにもかかわらず、これまでの『エッセー』のエディションはそれらを事実上無視しているという。これらが実は文章のリズムや簡潔さを作り出しているのだが、編者たちの「無意識の検閲」によって現代の基準に合うよう修正されてしまい、モンテーニュの遺志が反映されていない、と批判する。André Tournon, « L’énergie du “langage coupé” et la censure éditoriale », in *Montaigne et la rhétorique*, *op. cit.*, pp. 117-141.
- (24) その後のテキストの階層化 (a,b,c という記号が付加されたこと) については P. Desan, « Brève histoire de Montaigne dans ses couches », in *Montaigne Studies*, vol. VII, 1995, pp. 35-52 ; Antoine Compagnon, « Le repentirs de Fortunat Strowski », in *Montaigne et Marie de Gournay*, éd. M. Tetel, Paris, Champion,

- 1997, pp. 53-77. 最新のものに A. Legros, *Montaigne à l'œuvre sur l'Exemplaire de Bordeaux*, HAL archives-ouvertes. fr, halshs-01583048v2, 2017. (これはネット上で公開されているもの)。
- (25) R. A. Sayce and D. Maskell, *op. cit.*, pp. 25-29 ; J. Balsamo et Claude Blum, « Édition de 1595 », in *Dictionnaire de Michel de Montaigne, op. cit.*, pp. 352-358 ; J. Balsamo et M. Simonin, *op. cit.*, no 258-259 ; R. A. Sayce, « L'Édition des *Essais* de Montaigne de 1595 », in *BHR*, vol. 36, 1974, pp. 115-141 ; D. Maskell, « Quel est le dernier état authentique des *Essais* de Montaigne? », in *BHR*, vol. 40, 1978, pp. 85-103 ; A. Legros, « Montaigne et Gournay en marge des *Essais* : Trois petites notes pour quatre mains », in *BHR*, vol. 65, 2003, pp. 613-630 ; M. Simonin, « Aux origines de l'Édition de 1595 », dans *L'Encre et la Lumière, op. cit.*, pp. 523-549.
- (26) M. Simonin による表現。« Aux origines de l'Édition de 1595 », *art. cit.*, p. 528.
- (27) R. A. Sayce and David Maskell, *op. cit.*, pp. 30-33 ; J. Balsamo, « Exemplaire d'Anvers », in *Dictionnaire de Michel de Montaigne, op. cit.*, p. 421 ; J. Balsamo et M. Simonin, *op. cit.*, n° 266-268 ; Abel Günter, « Juste Lipse et Marie de Gournay : Autour de *L'Exemplaire d'Anvers* des *Essais* de Montaigne », in *BHR*, vol. 35, 1973, pp. 117-129. リプシウスとグルネー嬢との書簡については Jeanine G. De Landtsheer, « Michel de Montaigne, Marie de Gournay and Justus Lipsius. Some overlooked particulars preserved at Leiden University Library », in *Montaigne and the Low Countries (1580-1700)*, edited by P. J. Smith, Brill, 2014, pp. 63-78. 現存するリプシウスからモンテーニュへの三通の書簡は Michel Magnien, « Trois Lettres de Lipse à Montaigne (1587 [?] – 1589) », in *Montaigne Studies*, vol. XVI, 2004, pp. 103-111. で読むことができ、さらに両者の関係について考察したのが次の二つ。 *Id.*, « Montaigne et Juste Lipse : une double méprise ? », in *Juste Lipse (1547-1606) en son temps, actes du colloque de Strasbourg, 1994*, réunis par Ch. Mouchel, Paris, Honoré Champion, 1996, pp. 423-452 ; *id.*, « *Aut Sapiens, aut peregrinator*. Montaigne vs. Justus Lipsius », in *The World of Justus Lipsius : A contribution towards his intellectual biography. Proceedings of a colloquium held under the auspices of the Belgian Historical Institute in Rome, Rome, 22-24 May, 1997*, ed. Marc Laureys et al. Bulletin van het Historisch Instituut te Rome 68, Brussels-Rome, Brepols, 1998, pp. 209-232.
- (28) R. A. Sayce and D. Maskell, *op. cit.*, pp. 36-38 ; J. Balsamo, « Édition de 1598 », in *Dictionnaire de Michel de Montaigne, op. cit.*, pp. 358-359 ; J. Balsamo et M. Simonin, *op. cit.*, n° 309-310. グルネー嬢の『エッセー』のテキストへの尽力は P. Desan, « Marie de Gournay et le travail éditorial des *Essais* entre 1595 et 1635 : idéologie et stratégies textuelles », in *Montaigne et Marie de Gournay, op. cit.*, pp. 79-103.
- (29) ここまでの内容を簡単に読むことができるのは、*The Oxford Handbook of Montaigne*, ed. P. Desan, Oxford, 2016 に所収の Desan による ch. 5, « The Public Life of Montaigne », pp. 117-137 と Balsamo による ch. 8, « Publishing History of the *Essays* », pp. 158-178. また A. Legros が主宰するサイト *MONLOE : MONTaigne à L'Œuvre* (<https://montaigne.univ-tours.fr/>) では 1580 年版をはじめとする各地の図書館に所蔵されている『エッセー』の諸版を、Bibliothèques Virtuelles Humanistes を通じて参照でき、さらには必要な部分を PDF でダウンロードできる。これは素晴らしい一言に尽きる。
- (30) Cf. A. Legros, *Essais sur poutres : Peintures et inscriptions chez Montaigne*, Paris, Klincksieck, 2003, pp. 119-126. 書齋と隣の小部屋の関係性については *id.*, « Montaigne et sa bibliothèque. *Janus Montanus* decorator, ou comment aménager son deux-pièces », in *Le visage changeant de Montaigne/The changing face of Montaigne*, sous la dir. Keith Cameron, Paris, Classiques Garnier, 2003, pp. 69-87.
- (31) *Id.*, *op. cit.*, pp. 129-136 ; *id.*, « Travail de deuil et art de vivre : les deux inscriptions votives de la tour de

Montaigne », in *Montaigne Studies*, vol. XI, 1999, pp. 137-154. 『エッセー』がラ・ボエシの喪の作業であることについては、この Legros の論文のほかに、Françoise Charpentier, « Écriture et travail du deuil dan les Essais, de 1580 au troisième allongement », in *R.H.L.F.*, 1988, n. 5, pp. 828-838 ; M. Simonin, « Œuvres complètes ou plus que complètes? : Montaigne éditeur de La Boétie », in *Montaigne Studies*, vol. VII, 1995, pp. 5-34 ; Gérard Defaux, *Montaigne et le travail de l'amitié : Du lit de mort d'Étienne de La Boétie aux Essais de 1595*, Orléans, Paradigme, 2001. この新たに発見された銘文は一部欠損している。そのため Legros, *Essais sur poutres*, *op. cit.*, p. 146, note 20. と Defaux, *op. cit.*, pp. 223-226. においてそれぞれ補ったテキストを示している。「より難しい読みが有力 lectio difficilior potior」の原則からすれば、Legros の読みを採用すべきかもしれないが、この銘文はそもそも写本で伝承されたわけでもないので、より明確でシンプルな Defaux の読みを参照した。特に読みの違いによって意味が変わるわけではないことを付言しておく。

(32) 前述の A. Legros や G. Defaux の基本的な立場である。とりわけ G. Defaux, « “Nul n'est pas mal long temps qu'à sa faute” : Montaigne, La Boétie, les Essais », in *Montaigne Studies*, vol. XI, 1999, pp. 169-196. またイタリアルネサンスから古典主義時代までの文学と道徳哲学における「友情」の役割については Ullrich Langer, *Perfect Friendship, Studies in Literature and Moral Philosophy from Boccaccio to Corneille*, Genève, Droz, 1994. 特にモンテーニュについては pp. 164-176. ラ・ボエシの死を報告するモンテーニュの父宛ての手紙は *Œuvres complètes*, éd. A. Thibaudet et M. Rat, *op. cit.*, pp. 1347-1360. これと『エッセー』については、Gabriel A. Perouse, « La lettre sur la mort de La Boétie et la première conception des Essais », in *Montaigne et les Essais, 1580-1980*, actes du colloque de Bordeaux, éd. Cl. Blum, 1980, Paris, Champion, Genève, Slatkine, 1983, pp. 65-76. さらにモンテーニュとラ・ボエシのソネットについては Michel Magnien, « De l'hyperbole à l'ellipse : Montaigne face aux sonnets de La Boétie », in *Montaigne Studies*, vol. II, 1990, pp. 7-25. が詳しい。

(33) *EB* の活字複製版はアルマンゴ博士による浩瀚なエディション（フォリオ判、三巻本）がある。 *Les Essais*, reproduction typographique de l'exemplaire annoté par l'auteur et conservé à la Bibliothèque de Bordeaux, édition préparée par Arthur Armaingaud, Ernest Courbet et Henri Monod, Paris, Imprimerie nationale, 1906, 1927 et 1931, 3 vol. In-folio. この部分は tome II, p. 54. また写真複製版は Michel de Montaigne, *Essais, Reproduction en fac-similé de l'EXEMPLAIRE DE BORDEAUX 1588, annoté de la main de Montaigne*, édition établie et présentée avec une introduction par René Bernoulli, Genève-Paris, Éditions Slatkine, 1987, tome II, Pl. 334 を参照せよ。なお *EB* の写真複製画像はシカゴ大学による The Montaigne Project の該当ページから参照できる（2019/10/26 参照）

(<https://artflsrv03.uchicago.edu/philologic4/montessaisvilley/navigate/1/5/13/>)。

(34) *Les Essais*, éd. Jean Balsamo *et al.*, *op. cit.*, p. 416. なお興味深いことに、95 年版にはいくつか本文の刷りが異なるものが存在し、「O mon amy !」ではなく、前の文章の末尾に « une parfaite et entiere communication d'un ami. » となっているものもある。同じく 95 年版を底本としている *Les Essais*, éd. J. Céard, *op. cit.*, livre deuxième, p. 104. では後者となっている。

(35) *Les Essais*, éd. A. Armaingaud, *op. cit.*, t. II, p. 54, n. (4) ; *Les Essais*, publiés d'après l'exemplaire de Bordeaux par Fortunat Strowski, Hildesheim, New York, Georg Olms Verlag, 1981, vol. I, p. 83, n. 1 ; M. Simonin, « Œuvres complètes ou plus que complètes? », *art. cit.*, p. 31, n. 42. ここでなぜか Simonin は Armaingaud がモンテーニュ本人の筆によるものだと認めていると書いているが、Armaingaud 自身の

見解は、彼の注を見る限りでは反対のようだ。

- (36) このエディションは本文の下に現代語にはない語や表現の訳や、引用されているギリシャ、ラテン文の翻訳が載せられており、ヴァリエントは本文の後に置かれているが、本文の下の訳注とヴァリエントの場所は交替したほうがいいのではないだろうか。Oxford Classical Texts や Loeb Classical Library をはじめ、Les Belles Lettres もヴァリエントは本文の下に置かれている（もっとも『エッセー』の本文は写本に基づいているわけではないので、そうした古典叢書と同じ表記方法を採用しなくてはならないわけではない）。また、このエディション独自の記号の使い方がある。たとえば「:」が挙げられる。これは「88年版のテキスト:EBのテキスト」という風に使われていることから、どうやらテキストの変遷の時系列をあらわしているようだが、凡例も説明も一切ないので、読むものがその使い方を解き明かす必要がある。これは少し不親切だといえる。たとえば *Les Essais*, éd. Jean Balsamo *et al.*, *op. cit.*, « Notes et variantes », p. 1828, « Page 1104 », note *a* を見よ。
- (37) この点にかんしてギリシャ悲劇を題材として、興味深く論じているのが William Marx, *Le Tombeau d'Edipe. Pour une tragédie sans tragique*, Les Éditions de Minuit, « Paradoxe », 2012. (『オイディプスの墓——悲劇的ならざる悲劇のために』、森本淳生訳、水声社、2019) である。
- (38) Ulrich von Wilamowitz-Moellendorff, « Was ist Übersetzen ? », in *Reden und Vorträge*, 2. Auflage, Berlin, Weidmannsche Buchhandlung, 1902, p. 4, « (...) er [der moderne Mensch] muss durch Arbeit die Voraussetzungen zurückgewinnen, welche durch Raum und Zeit dem Dichter gegeben waren ».

~~Am cas que cest~~
~~que ie suis tres pignable~~
~~Et curra bon comme a ses dics de quel pris est un amy~~
~~de comen autre chose que ces liaisons d'amicer. L'usage me me que i'en uois~~
 ESSAIS DE M. DE MONTA.
 fer piper. Si nous y voyons, que seroit ce de nous mesme en
 ce temps, ou les Iuges qui ont à decider nos cōtrouerses, sont
 communément partisans de l'enfance & ineressez. Feu Mō-
 sieur le Marechal de Mouluc, ayāt perdu ^{son fils} celui de ses enfans,
 qui mourut en l'Isle de Maderes, braue gentil homme à la ve-
 rité & de grande esperance, me faisoit fort valoir entre ses au-
 tres regrets, le desplaisir & creue-cœur qu'il sentoit de ne s'e-
 stre iamais cōmuniq̄ à luy: & sur cette humeur d'vne gra-
 uité & grimace paternelle, auoir perdu la cōmodité de gou-
 ster & bien connoistre son fils, & aussi de luy declarer l'extre-
 me amitié qu'il luy portoit, & le digne iugement qu'il faisoit
 de sa vertu. Et ce pauvre garçon, disoit-il, n'a rien veu de moy
 qu'vne contenance refroignée & pleine de mespris, & à em-
 porté cette créance, que ie n'ay sçeu ny l'aimer ny l'estimer
 selon son merite. A qui gardoy-ie, à decouvrir cette singulie-
 re affection que ie luy portoy dās mon ame? estoit ce pas luy
 qui en deuoit auoir tout le plaisir & toute l'obligation? Le me
 suis contraint & geiné pour maintenir ce vain masque: & y
 ay perdu le plaisir de sa conuersation, & sa volonté quant &
 quant, qu'il ne me peut auoir portée autre que bien froide,
 n'ayant iamais reçu de moy que rudesse, ny senti qu'vne fa-
 çon tyrannique. Je trouue que cette plainte estoit bien prise
 & raisonnable: car comme ie sçay par vne trop certaine experi-
 ence, il n'est aucune si douce consolation en la perte de nos
 amis, que celle que nous aporte la science de n'auoir rien
 oublié à leur dire, & d'auoir eu avec eux vne parfaite & entie-
 re communication: Je m'ouure aux miens tant que ie puis, &
 leur signifie tres-volontiers l'estat de ma volonté, & de mon
 iugement enuers eux, comme enuers vn chacun: ie me haste
 de me produire, & de me presenter: car ie ne veux pas qu'on
 s'y mesconte, à quelque part que ce soit. Entre autres coultu-
 mes particulieres qu'auoyēt nos anciens Gaulois, à ce que dit

